

伊栗慎太郎事件ファイル

わが母の教えたまいし歌
松村光生



著者略歴 昭和23年生，早稲田大
学商学部中退，作家 主著書「グ
ッドバイ・ロリポップ」（早川書
房刊）

HM=H
S
JA

NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy
YR=Young Romance
GB=Game Book

わが母の教えたまいし歌

〈JA342〉

著	発行者	印刷者	発行所	乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。
松村光生	早川 浩	矢部 一憲	株式会社 早川書房	
一九九一年二月二十日			東京都千代田区神田多町二ノ二 電話東京(三二五)三二二(大代表) 振替口座番号 東京六四七七九	
印刷			郵便番号 一〇一	
(定価はカバーに表 示してあります)				

印刷・三松堂印刷株式会社 製本・株式会社川島製本所
Printed and bound in Japan

ISBN4-15-030342-8 C0193

ヤカワ文庫JA

〈JA342〉

わが母の教えたまいし歌

松村光生

日本財団支援

早川書房

2945

目次

第一章	赤いドレスの女……………	七
第二章	人生の最良の日々……………	五
第三章	おお、運命の女神よ……………	二二
第四章	今宵の君は……………	一九
第五章	めまい……………	三三
第六章	ああ、お母さん聞いて……………	三三
あとがき……………		二八

わが母の教えたまいし歌

登場人物

伊栗慎太郎	私立探偵
中村静子	依頼人
野口鉄男	中村静子の婚約者。伊栗慎太郎の元親友
大内山良子	中村静子の姉
大内山俊二	良子の夫。先代広野組組長
茅野栄二	現広野組組長
高橋和夫	刑事
島川近男	国勢局のシステム・オペレーター
深川道代	伊栗慎太郎の元同僚
井崎麗子	
青田忠司	
内藤肇	

第一章 赤いドレスの女
WOMAN IN RED

1

厚くどす黒い雲が上空をゆっくりと渦巻き、時おり光る稲妻が林立する摩天楼を黒々と墓標のように照らした。永遠にやむことがないように感じられる霧雨は防水コートの上からもじわじわと湿気を全身ににじませる。そしてその湿気はいつしか心の中にまでにじんできそうな気がする。

褐色の機体を雨に光らせて浮遊するエアバスが、時おりビルとビルとの狭いすき間をゆったりと、しかし器用にすり抜けるさまは、鈍重で巨大な水棲の甲虫を思わせる。

ここ渋谷は二十世紀後半には若者の街と呼ばれていたのだそう。おれには当時の若者がどうしてこの街を好んでいたかはわからない。だいたい若者の街というのがどんな様子だったのか見当もつかないのだ。

確かにビルとビルとの間隔は、おれの住んでいる田園調布あたりと較べるとゆったりしてい

る方だろう。街のステイタスではこの間隔によってあるていど決まるわけだが、まあ、超はつかないにせよ渋谷が高級ビジネス街であることはまちがいない。まして道玄坂の上の一角に位置するコンドミニウムに住めるというのは高額所得者に限られている。

良子の住むコンドミニウムの向かい側の二十四時間営業の喫茶店のドアを開くと、いつものように窓際の席に座っていた深川道代がサングラスを外しながらおれに軽くなづいた。

「変ったことはなかった？」

事務的なおれの質問に道代は黙ってうなづく。まあ、変ったことでもあったなら、こんなに落ちついてもいないだろうし、何か連絡があったはずである。

「雨が降ってるせいとか、買物にも出ずに一日中閉じこもってたわ。小犬の散歩も中止。来客もなし。まったく退屈でしょうがないわよ。いっそ何か変ったことでも起きて欲しいくらいだわ」

道代は珍しく愚痴をこぼしながらハンドバッグを手にして立ち上がった。彼女は探偵社時代の同僚であった頃から尾行と張り込みに関しては超ベテランであり、驚くべき忍耐力と自制心の持ち主で、普段は冗談にもこのような愚痴をこぼす女ではない。

「お疲れさま。あと、二、三日して進展がないようだったら、ちょっとやり方を変えてみよう」

「あら、わたしのためなら作戦変更しなくていいのよ」

道代はにっこりと笑って言った。男まさりの性格とは無関係に、笑うと両頬にふたつずつ小さなえくぼができる。

「日報にも書いておいたけど、昨日と同じ黒い背広の小柄な男が正午と三時にコンドミニアムの周囲をうろついていたわ。関係ないとは思うけど、一応気にとめておいて」

道代は日報と一緒にインスタントカメラで撮った写真をおれに手渡した。この写真では人相ははっきりとはわからないが、おれが担当している時間帯には多分一度も見たことのない男だ。二日続けて現れたとなると確かに気にとめておいたほうがよからう。

「それじゃあ、がんばってね」

道代はおれの肩をぽんと叩くと足早に喫茶店を出て行った。

別に道代のために作戦変更をしようと思っっているのではない。やはり二十四時間の張り込みおよび尾行というのはふたりで二交替というのはきつすぎる。

それにしても、われわれのような二十一世紀の探偵が張り込みや尾行などという時代遅れの行動を取るといふのは多少情けない。大手の探偵社や、実入りのいい私立探偵は、今や尾行などほとんどしない。パラサイトという超小型の発信機を相手の衣服や持物に忍ばせて、3DGBと呼ばれる追跡用のマシンを使って、部屋の中にいながらにして相手の居場所を知ることができるのだ。しかし、先日開業したばかりの貧乏探偵のおれには3DGBなどという馬鹿高い

マシンを買うことはできない。そのうち市販の3DGBよりも遙かに性能のいいやつを自宅のコンピュータを利用して自作してやろうかとも思っている。自慢ではないが、コンピュータのハードウェア、ソフトウェアに関しては、おれは探偵業界で一番の知識の持ち主であると自負している。

もともと、今回の依頼は、調査だけではなく、身辺の護衛も兼ねているわけだから、どうせ尾行は必要なのだが。

交替して一時間後、いつものように良子はコンドミニアムの門衛に見送られて階段を降りてきた。毛むくじらの小犬を連れ、真っ赤なワンピースを身にまとって軽々とした足どりで通りにでる。まるで霧雨を軽蔑するかのように傘もささず、レインコートさえ身につけていない。予定の行動なのでおれはすでに喫茶店を出て、表に立って待っていた。おれは軽くため息をつくと、十メートルばかりの距離をおいて、彼女の後をつけた。これが彼女のいつも通りの行動であるならば、道玄坂を下って二区画ほどの尾行ですむはずだし、おれも喫茶店のサンドウィッチ以外の食事をとることができるはずなのである。

やはり予想通り、良子は毎日通っている高級レストラン『大日本飯店』に入った。最初の日、おれも尾行の手前つられて入ったはいいが、メニューを見るなり、コーヒ一杯飲むのにおれの数日分の食費がぶっ飛びそうになるのに気がついて、ボーイの侮蔑のまなざしも無視して、

慌てて店から逃げ出した。

食事ならコンドミニアムでルームサービスも取れるはずなのだが、気分転換のためなのか、このレストランがよほど気に入っているのか、良子は毎日同じ時刻にここへやってくる。普通こんな高級レストランに犬を連れて入ることはできないと思うのだが、良子がボーイに鼻薬でもかがせているのか、犬がよほど行儀いいのか、いつも一緒に入ってしまう。

良子の規則正しい食事のおかげでおれも同じ時刻に夕食をとることができる。

『大日本飯店』の店内に入れないのは探偵としては多少不満なのだが、一応入口と窓は大きなガラス張りなので店内の様子は監視できるので。おれはいつものように、向かい側のファーストフードの店に入った。

「フライドチキン三つに、玄米粥とお新香」

カウンターでおれがそう注文すると、白いユニフォームに赤い頬の女の子が陽気な声で歌うように復唱する。

「フライドチキン、スリーピースに、玄米グルエルに、ジャパニーズピクルスですね、お飲み物はいかがいたしましょう」

「烏龍茶ちょうだい」

「はい、ウーロンソーダひとつ。かしこまりました」

「あ、ちょっとちょっと。ソーダじゃなしに、普通の烏龍茶が欲しいんだけど」

女の子の顔から笑顔が消えた。

「は、ウーロンソーダしかございませんけど」

「あら。いつも作ってもらってるんだけどなあ。どうせ原液をソーダで割るか水で割るかの違いでしょ。水で割ってくんない」

女の子が困ったような顔でうしろを向くと、いつも顔を合わせているこの店の店長が立っていて、女の子に重々しくうなづいた。おれと顔が合うと、即座にわざとらしいつくり笑いを浮かべた。どうやら了承してもらったようだ。ファーストフードで色々と注文をつけるのがルール違反であるのはおれだってわかっているのだが、ウーロンソーダてのは苦手なのだ。なんでも最近なんでもかんでもソーダで割りたがるんだろなあ。

おれはトレイを持って、通りに面したカウンターに持って行った。ガラス越しに『大日本飯店』を眺める。良子もひとりで窓際の席に座っている。きつとこれから目玉の飛び出るような値段の食事をするのだろう。たつぷりと時間をかけて。まあ、そのおかげで、おれも食後のコーヒーをゆっくりと味わうことができるわけなのだが。

あの日おれは私立探偵を開業したものの、一週間の間、まるっきり依頼もなく、大いに手持ちぶさただった。

つい先日まで勤務していた探偵社が倒産してしまって、ついに長年のあこがれであった私立探偵になったとはいいが、依頼が一件もないというのはさすがに心細い。このまま仕事の依頼がないんじゃないかという恐怖感が時折おれを襲う。

探偵がこんなに退屈だったり、不安であったりしていいものだろうか。

昔のアメリカの探偵小説を読んだり、探偵映画を見る限りにおいては、私立探偵の生活というのはもつと潑刺としているはずなのである。夫の死に不審をいだいた美人の未亡人や、行方不明の父親を心配する富豪令嬢と、クールでしゃれた会話を交わしたりするのだ。街のやくざや悪徳警官にからまれても平然として憎いせりふを吐いたりもするのだ。依頼人と恋に落ちてもメロメロになったりしないであくまで冷静なのである。

そりやおれだって自分がハンフリー・ボガートやロバート・ミッチャムだと思っっているわけではない。だからアイダ・ルビノみたいな令嬢やシャーロット・ランプリングみたいな未亡人が年中おれの事務所のドアをコンコンとノックすることを期待しているわけではないのだ。

その時ドアをノックする音が聞こえたのである。

本当は「どうぞお、ドアは開いてますよお」とでも怒鳴っていればいいものを、おれは「はいはいはいはい」などと言いながら、いそいそとドアを開けに走ったのだった。